

マクベスの「みかけ」と「まこと」

— シェイクスピアの実存 —

内 藤 史 朗

一九六四年五月、第三十六回日本英文学会のシンポジウム「シェイクスピアの現代的意味（または現代性）」に於いて、「マクベス等には、サルトルの実存主義的なものが感ぜられるが如何」という私の提起した問題に対して、司会の倉橋健氏は、実存主義的な解釈による演出はよく行われており、ポーランドのヤンコットが、シェイクスピアの実存について書いていると、結びの時に答えられた。

ところで、シェイクスピアに、サルトルの実存主義的なものを生み出す蓋然性があつたかという問いに対して、私は、この蓋然性はシェイクスピアのドラマツルギーの発展過程の中に見出されると答えよう。

私が、ここで、サルトルの実存主義的なものというのは、「対自」^①として捉えた人間存在の把握の仕方の事である。

「対自」存在とは、「それがあるところのものであらず、それがあらぬところのものであるような存在」^②であつて、「自己自身に対すると同時に、自己から離れて行くという弁証法的ありかたをする存在」^③である。

「対自」として人間を捉える仕方は、シェイクスピアの場合、初期の喜劇の道化にその萌芽があり、『ヘンリー四世』のフォールスタッフに至つて、「笑われる自己」と「笑わず自己」の矛盾^④として捉えられた。

悲劇期に入ると『ハムレット』に於いて、「みかけ」(to seem)と「まこと」(to be)の矛盾として捉えられ、『マクベス』に至つて、この矛盾が更に突きつめられ、アクシヨンの面で、「みかけ」と「まこと」の「対自」が弁証法的な展開を見せたと考えられる。いうまでもなく、シ

エキスピアの「対自」は、劇作家としての修業の過程に於いて、彼が発見し得たものであって、舞台に於いて表現しなければならぬ関係上、サルトルの「対自」とは異なつたあらわれかたをする。例えば、サルトルは、哲学論文の中で「否定」と簡単にいい切れても、シェイクスピアの「否定」は舞台上に具象化しなければならないので、幽霊や蠟燭の火を使って劇的に表現する。私は、「対自」が「自己自身に對する、同時に、自己から離れて行く」という弁証法的なありかたをする」と述べたが、「対された自己」を「みかけ」と呼び、「離れて行く自己」を「まこと」と名付ける。サルトルでは、「仮象」と「存在」がこれに当る言葉であり、シェイクスピアでは、*'to seem'* と *'to be'* がこれに当る。したがって、幽霊(宴会の場)や蠟燭の火は、「まこと」の具象化という事になる。この場合の「まこと」は「あるべき自己」と考えてよいと思う。何故なら、「みかけ」が闇のように地上を覆う時、「まこと」は「ある」という姿ではなく、「あるべき」姿でしかあり得ないからである。「対自」が、「あるべきである」というありかたにおいてある存在といわれる所以である。

「対自」に於いては、或る意識が意識されると、その意識は「みかけ」になり、「まこと」は衝動として、その存

在を確認する事は出来るが、「まこと」の正体が何であるか自分には判らない。いや、判らないように努めるというべきだろう。具体的に『マクベス』に於いて例証してみよう。

「おゝ、勇敢な従兄弟よ、立派な紳士よ」とダンカン王に賞められる時、マクベスは、自ら、「忠節な將軍」と意識していたと考えられる。ところが、魔女が彼に予言を与えて消えた時、彼は衝動的に叫ぶ。

‘Would they had stay’d!’ (魔女が留って呉れたらなあ)

假想法で表現されたこの衝動は、彼の「まこと」であり、「忠節な將軍」という意識は「みかけ」である。この衝動は、後に野望へと成長して行く種子なのだが、彼は、この段階では、それが野望だとは意識していない。意識されない衝動を、「まこと」といってもよい。然るに、次の傍白にみられるように、一旦野望が意識されると、野望そのものが、今度は、マクベスの「みかけ」に転化して、それと同時に、彼の新しい「まこと」は「みかけ」から離れて、「みかけ」と「対自」する。

Two truths are told,

As happy prologues to the swelling act

Of the imperial theme. —……

This supernatural soliciting

Cannot be ill; cannot be good: —

If ill, why hath it given me earnest of success,

Commencing in a truth? I am Thane of Cawdor:

If good, why do I yield to that suggestion

Whose horrid image doth unfix my hair,

And make my seated heart knock at my ribs,

Against the use of nature? Present fears

Are less than horrible imaginings.

My thought, whose murder yet is but fantastical,

Shakes so my single state of man,

That function is smother'd in surmise,

And nothing is, but what is not. (I. iii. 127-42)

(王冠を主題とした壮麗な芝居の幸先よいプロローグとして二つの真実が語られた。この魔女の誘惑は悪いとも良いとも言えぬ。もし悪いなら、何故、真実の手初めとして成功の手附を俺に呉れたのか。

俺はコーダの領主なのだ。もし良いのなら、何故俺はこんな誘いになびくのか。それを想うだに恐ろしいイメージが俺の髪の毛を逆立て、自然に反して、落ち着いた心臓をあばら骨にぶつつけるのに。

今の不安は、これからの怖るべき想像にくらべればまだましだ。殺人はまだ空想にすぎないのに、俺の想いは、秩序立っていた俺の身体をゆさぶって、その機能は、臆測の内に窒息した。

ないものだけが真実だ。——拙訳)

この傍白は、冒頭から、彼が野望を意識している事を明示している。野望を意識すると同時に、彼は、「心臓があら骨にぶつかる」衝動を感じる。マクベスが、このような衝動を感じるの、彼の「まこと」が、「意識された野望」即ち「みかけ」から離れて、対立するからである。この場合の「まこと」は、意識されない良心といえ、諒解されるだろうが、私は本論に於いて、「あるべき自己」と呼び、後に詳しく述べる。

さて、ここまでの事をまとめてみると、注目すべき事実が判明する。それは、前述した仮想法で表現された意識されない野望が、「まこと」であったのに、傍白の意識された野望は、「みかけ」に転化したという事実である。この事実こそ、「対自」の弁証法的展開——否定の否定——を立証し、マクベスのダイナミックなアクションの展開を物語る。(この場合のアクションの定義は、山本修二先生の言われた次のような広義のものに従う。)

「広い意味で使用される時は人々のくらし方と、彼等のなすことと、彼等の送る内的生活とを包含する」と、(G・マレーは——筆者注) いているが、彼がくらし方と言っているのは意志的でない倫理的でない生活、即ち「pathos」を意味するので

あろうし、「なすこと」と言っているのは、狭い意味の、*praxis*、であろうし、「内的生活」と言っているのは、………まだ動作に現われぬ前の、*ethos*、を意味するものと解釈してよからう。

ところで、マクベスは、傍白の時に、重大な思い違いをしている。というのは、傍白の意識された野望は「みかけ」に転化しているのに、彼は、この野望を「まこと」と信じているのだ。したがって、この時の本当の「まこと」——「心臓をあらばら骨にぶつつける」あるべき自己——は全く理解されていない。

「ないものだけが真実だ」という傍白の結語は、「みかけだけがまことだ」と言っているように考えられる。こう言った時から、マクベスの自己欺瞞(はじめは思い違いで、後に自己欺瞞になる)が始まる。

マクベスは、偽りの仮面をかぶって、ダンカン王に忠義面をするだけでなく、自らの「まこと」＝「あるべき自己」から顔をそむけ、野望こそ「まこと」と信じ込む。「まこと」と「みかけ」を思い違えたマクベスが、次第に、「みかけ」を「まこと」と自分に言い聞かせるという自己欺瞞に徹するようになる。このように、マクベスには、偽りと自己欺瞞との二重の「あざむき」がある。前者は、他者に

対する「あざむき」であり、後者は、自己に対する「あざむき」である。

他者への偽りは、劇の状況(situation)や筋(plot)と深く関連している。そのような偽りの成功や失敗によって、状況や筋が変化して行く。状況について、L・C・ナイツは、「マクベス夫人には何人の子供があったか」という論文の中で、この偽りを分析して、「あざむきの仮象」(deceitful appearance)と名付けた。マクベスの偽りが発覚した時に現われる彼の真実は、ナイツの見地からすると野望である。すると、マクベスは、単なる悪党という事になるが、このようなL・C・ナイツの見地からでは、マクベスの自己欺瞞の相を明らかにする事は出来ないだろう。そして、自己欺瞞の奥にひそむ「まこと」即ち「あるべき自己」を見分ける事は出来ない。何故、ナイツが見分けられないかと言うと、ナイツは状況を重視したが、自己欺瞞はアクションの相にあらわれているからだ。私は、マクベスのアクションにあらわれた自己欺瞞と、その裏にある「まこと」即ち「あるべき自己」の追求を、この小論のテーマとするのである。

ところで、余談として、さし入れておくが、マクベス夫妻の衣裳のイメージを、バンクオウやアンガスのそれと比較してみ

ると面白い結果が出て来る。

Banquo. New honours come upon him,

Like our strange garments, cleave not to their mould,

But with the aid of use. (I. iii. 145-47)

(彼に与えられた新しい名譽は、着なれぬ衣服のよう、
に、着ならずまでは身体にぴったりしない。——拙訳)

Angus. Now does he feel his title

Hang loose about him, like a giant's robe

Upon a dwarfish thief. (V. ii. 20-2)

(今では、彼は、ちびの盗人が着た巨人の長衣のよう
に、彼の肩書が、だぶだぶなのを感じている。——拙
訳)

このように、マクベスの野望の衣裳(「みかけ」)の偽りを見
破いた表現にふさわしく、直喩(simile)を使っている。

然るに、マクベス夫妻の場合は、「みかけ」の野望を「まっ
か」と信じている表現にふさわしく、隠喩(metaphor)を使っ
ている。

Macbeth. The Thane of Cowdar lives: why do you dress me

In borrow'd robes? (I. iii. 108-9)

(コーダの領主はまだ生きている。何故、俺に借り着
を着せるのか。——拙訳)

Macbeth. and I have bought

Golden opinions from all sorts of people,

Which would be worn now in their new gloss,

Not cast aside so soon.

Lady Macbeth. Was the hope drunk

Wherewith you dress'd yourself? (I. vii. 32-6)

(マクベス——それに俺はつい今しがた、いろんな連中から貴
重な評判を買い取ったばかりだ。それも、ピカピカし
た新しいのが着れるのに、おいそれと捨てるのもどう
かと思うよ。)

マクベス夫人——貴男が身にまとった野望は、酔っぱらって
いたのですか。——拙訳)

「みかけ」にすぎない野望を、「まこと」と思い違えて
いるマクベスの自己欺瞞は、マクベス夫人のつけ込む余地
になる。

Macbeth. I dare do all that may become a man;

Who dares do more in none.

Lady Macbeth. What beast wast thou then,

That made you break this enterprise to me?

When you durst do it, then you were a man;

And, to be more than what you were, you would

Be so much more the man. (I. vii. 46-51)

(マクベス——俺は人間にふさわしい事なら何でもやろう。そ
れ以上の事をやる奴は人間ではない。)

マクベス夫人——それでは、貴男にあの野望を打ち明けた時
の何んな獣でしたか。貴男が野望を打ち明けた時、

貴方は人間でいたね。だから、貴男が、今以上にね、
は、ますます人間らしくなるのです——拙訳)

原文のイタリック(訳では傍点)の個所は、「みかけ」と
「まこと」を思い違えているマクベスに錯覚を起させる。
「野望を打ち明けた時」のマクベスは、「あるべき自己」
即ち「まこと」ではなく、「みかけ」であった。「みかけ」
を土台にして、「今以上」になっても、所詮、「まこと」
の価値は得られない筈である。それなのに、マクベスは、
思い違いから、「みかけ」の土台の上に築く城を、「ま
と」の人間的価値を示す城と思い込む。彼は「まこと」
「あるべき自己」に基礎をおかずに、「みかけ」＝「野望」
に基いて、王位を横領し、自己欺瞞の城を築くのである。
マクベスは、自分の偽りの仮面と自己欺瞞を、一幕の終り
にこう述べている。

Away, and mock the time with fairest show:

False face must hide what the false heart doth know.

(I. vii. 82-3)

(行こう、そして、まことしやかな装いで世をからかうのだ。偽
りの顔は、偽りの心を知るものを隠さねばならぬ。——拙訳)
自己欺瞞は、「まこと」によってしつぱ返しを喰らう。
このしつぱ返しは、王暗殺に一応成功し、王位を横領した

マクベスが、華々しい宴会を開いている彼の最絶頂に訪れ
る。

三幕四場、宴会の場——

マクベスの野望を知っているバンクォウは、マクベスの
「不安の根源」であったが、暗殺者を使って、このバンク
ォウも殺してしまった。ただ、バンクォウの子息フリーア
ンスだけは取り逃がしたという報告を聞いた時、マクベス
は次のように言う。

Then comes my fit again: I had else been perfect;

Whole as the marble, founded as the rock,

As broad and general as the casing air:

But now, I am cabin'd, cribb'd, confin'd, bound in

To saucy doubts and fears. — (III. iv. 19-24)

(では、また、俺の発作が起る。うまく行けば、俺は、大理石
のように隙がなく、岩石のようにどっしりして、大地を覆う空
気のように広々と至る所に行きわたり、完全無欠であったら
うに。然し、今、俺は、閉じ込められ、押し込められ、監禁さ
れて、ずうずうしい疑心と不安に縛られた。——拙訳)

大理石や岩石や空気のように、不安の入り込む隙間——
欠けた部分——のない存在、即ちサルトルのいう「即自」
存在になりたがるマクベスの気持が、ここには述べられて
いる。「対自」が意識即ち人間存在を指すのに対して、「即

「自」は事物存在を指す。「即自」存在は、ある通りのものであつて、「対自」のように「みかけ」と「まこと」の矛盾対立はなく、全く「みかけ」通りのものである。従つて、岩石や大理石や空気のような「即自」存在には、「否定」としての「まこと」はなく、不安の生じようがない。ところが、野望を果し王位に即いたマクベスは、「みかけ」がいくら立派になつても不安が消えない。消えないどころか、益々増大する。こうなるのは、「みかけ」と「まこと」の矛盾対立が大きくなっているからだ。

そして遂に、幽霊が現れる。「バンクォウさえ出席すれば、我々は、この国の名士を一堂に集めたことになる。」とマクベスが言つた途端に、バンクォウの幽霊が席について、じつとマクベスを見つめる。熊もサイも虎も怖れぬマクベスが、この幽霊には震えおののく。熊やサイや虎は恐怖を惹き起すかも知れぬ。恐怖は状況によつて生じるのだが、この幽霊は、マクベスに、不安を惹き起すのであつて、不安は自己の否定によつて生じるのである。幽霊の出現は、マクベスにとって、自己の否定の表明なのである。「みかけ」を「まこと」と信じ込む事によつて自己欺瞞を通して来たマクベスは、幽霊によつて、彼が「まこと」と信じて来た自己——實際は「みかけ」の自己——が否定されるの

である。

E・E・ストールは、当時は幽霊の實在が信じられたと言っているが、この種の説は、現代の我々が、幽霊の實在を信じないのに、この宴会の場の幽霊の出現に衝撃を感じるのは何故かという問いに対しては、何等の答えにもなっていないのである。幻想説(幽霊はマクベスの幻想にすぎないと考える説)にも理のある事を菅泰男先生は述べておられるが、私は新しい角度から私見を述べてみたい。(私の説は、幽霊の實在が信じられたかどうか、この場面の劇的效果に影響はあつたとしても、マクベスの不安を生ぜしめる幽霊の出現の意味を説明し得ないと言うのである。又、幻想説は幽霊の出現をマクベスの良心の苦悶のあらわれ等と説いてみた所で、マクベスの不安が幽霊によつて惹き起される理由を説明する事にはならないと私は思う。)

スコットランド王国は、深い闇に閉ざされている。マクベスの内面も自己欺瞞の闇に閉ざされている。王国は仮象となり、マクベスも「みかけ」に蝕ばまれて、もはや「みかけ」そのものになつてしまった。マクベス王とはそのやうな彼の姿なのだ。マクベスはこの「みかけ」を「まこと」と思い込んでいる。

このような状況にあつて、マクベスの本当の「まこと」

即ち 'what he is' は、「あるべきマクベス」即ち 'what he should be' というありかたでしかあらわれない。

マクベスがバンクォウを宴会に招待した時、バンクォウは、出席を誓約した。そして、マクベスが宴席で、「バンクォウがいたら」とか、「バンクォウのために乾杯」と言う、バンクォウの幽霊が約束通りに、あるべき席につくのである。この幽霊は、「マクベスの良心の苦悶を示すもの」となって観客に示される。¹⁹と菅先生は述べられているが、私は、新しい見解を、「良心」というロマンチック批評の臭みを帯びた言葉を使わずに述べてみたい。

マクベスと幽霊との対立は、マクベスの内面を具象化したものと言えるのではないか。

即ち、マクベスの「みかけ」と「まこと」の対立、言い換えれば、「対自」の具象化であり、劇化であると私は思う。この場合、マクベスの「まこと」は、あるべき姿(出席すべきバンクォウ)となつて、「みかけ」のマクベス王を否定するために対立するのだ。この対立を感動的にするため、バンクォウの幽霊を、舞台に出現させなければならぬ。このように考えれば、マクベスが幽霊と対決する時の彼の不安は、自己の存在を否定する事によって生じるのである、虚無の深淵を一べつする不安である事が判明する。

観客も、主人公マクベスの不安を分け持つのである。幽霊の實在が信じられた当時は、不安だけでなく、恐怖も、観客の心にかき立てられたに違いない。そして、その實在を信じない我々現代人にも、この不安は理解出来るのである。

マクベスが、かねて野望の王になり、最絶頂の瞬間に、彼の「みかけ」(マクベス王)が、彼の「まこと」(あるべき姿をしたバンクォウの幽霊)と対立するという事実こそ、私は、サルトルのいう「対自」をみるのである。そして、「みかけ」と「まこと」の対立のテーマから考えて、この場面にクライマックスを認めるのである。又、L・C・ナイツも、この場面にそれを認めている。²⁰

さて、虚無の深淵を垣間見たマクベスは、「まこと」を直視して実存への道を歩むのではなく、それとは反対に、自己欺瞞を更に強化しようとする。彼は次のように言う。

My strange and self-abuse

Is the initiate fear, that wants hard use:

We are yet but young in deed. (III. iv. 141-43)

(俺の変な自己欺瞞は、踏み固めの足りない駆け出しの不安なのだ。俺達はまだ実行にかけては口ばしが黄色い。——拙訳)

「踏み固めの足りない不安」は、踏み固める回数を重ねれば克服出来ると、彼は考えるから、魔女の手助けによっ

の意味を考えてみよう。

Heaven doth with us as we with torches do,
Not light them for themselves; for if our virtues
Did not go forth of us, 'twere all alike

As if we had them not. ('Measure for Measure' I. i. 32-35)

(天は人間を、人間が松明を使うように、お使いなされる。松明は、松明自身を照らす為の物ではないと同様に、もし才徳が他人を裨益する用をしなければ、それは有れども無きにひとしいと言わなければならぬ——逍遙記)

この引用は、松明 (torches) と同じであるが、ともしび (candle) と同じ意味に使われている事はマタイ伝五章十四—六節 (本論文の最後に掲げているから参照せよ) を見れば納得出来る。これらの引用から、私は、マクベス夫人の手に持つともしびは、「あるべき自己」を意味すると思う。つまり、神のともしびとして恥づかしくないマクベス夫人の「あるべき自己」を意味すると思うのである。「みかけ」が闇のように覆っている状況にあつては「まこと」の彼女即ち 'what she is' が、「あるべき彼女」即ち 'what she should be' としてしかあり得ない。(この事は、マクベスの場合にすでに述べた。) したがつて、この場面のマクベス夫人にも「みかけ」と「まこと」の対立が認められる。ただし、この場合には、「まこと」の光、つまりともしびの光は、

眠っている「みかけ」の彼女にはとどかないのだ。

言い換えれば、「まこと」と「みかけ」の間には、渡す橋もない断絶が認められる。「憐みへの通路を断て」と一幕五場 (前掲参照) で叫んだマクベス夫人は、通路をふさいだために、(言い換えれば、自己欺瞞のために) 取り返しつかないし、つべ返しを喰らう。つまり、発狂するのである。夫人の死が報ぜられると、マクベスは、次のように言う。

To-morrow, and to-morrow, and to-morrow,
Creeps in this petty pace from day to day
To the last syllable of recorded time,
And all our yesterdays have lighted fools
The way to dusty death. Out, out, brief candle!
Life's but a walking shadow; a poor player,
That struts and frets his hour upon the stage,
And then is heard no more: it is a tale
Told by an idiot, full of sound and fury,
Signifying nothing. (V. v. 19-28)

(明日こそは明日こそは明日のやまに
日一日と小きやみに這ひて行へ
時の最後の一きやみまで。
そして、全ての昨日は愚か者に
墓穴への道を照らして来た。
消えろ、消えろ、つかの間のともしびよ。

人生は歩み行く影にすぎない。

持ち時間だけ舞台を、ぶつてのし歩く哀れな役者で、その後は何の音沙汰もない。

人生は痴呆が物語る話であり、

騒ぎと怒りに充ちて無意味なのだ。——拙訳)

イタリックの三個所に注意しなければならない。‘Out, brief candle!’は、直前の文と直後の文の転回点になっている事に気付くだろう。(故渡辺克己氏もこれに気付いていた。この点を境として、光が影になる。

L・C・ナイツは、劇『マクベス』の状況を分析して、仮象 (appearance) を闇、真実 (reality) を光で表現している事に気付いていたが、私は、マクベスのアクションの面でもこれと同じように、「みかけ」を影、「まこと」を光で表現していると思う。こう考えると、今の場合、‘all our yesterdays have lighted fools the way to dusty death’は、マクベスが夫人と共に野望に明け暮れた「昨日」の自己を「まこと」と思い込んでいる事になる。実際、自己欺瞞に蝕まれたマクベスは、自分自身の真実の自己さえ分らなくなっていた。いや、むしろ、分らなくなっていたのである。‘lighted’という言葉に触発された事であろう。彼は、眼の前のともしび (candle) を見る。(勿論、この場合

小道具として、‘candle’を用意しなければいけない。)

‘brief candle’は、マクベスの「みかけ」の人生を指すのではないと私は思う。それでは、如何に解釈すれば、‘brief candle’が転回点としての機能を果して、劇的效果を収め得るか。

私は、まず、ドーヴァ・ウィルソンの注釈を尊重する。ウィルソンは、本論にて前掲の旧約聖書「箴言」二十章二十七節と、「以尺報尺」(Measure for Measure) 一幕一場 (32—35行) とをあげて注意を促している。「主のともしび」であり、「天の松明」である人間の生涯即ち人生こそ、マクベスの「あるべき自己」即ち「まこと」であった。そのような「あるべき自己」即ち「まこと」こそ、‘brief candle’の意味するものであると私は思う。(‘brief’は、人生の有限を示すと考えられる。今、‘lighted’と言って自分達の野望に明け暮れた人生を、‘まこと」と言ったのに、この眼前で燃えるともしびは、マクベス夫妻の人生を「まこと」ではないと否定するのである。真の「まこと」は、このともしび (candle) に具象化されているのだ。ともしびに具象化された真の「まこと」は、マクベスの「あるべき自己」であって、この「あるべき自己」が、今のマクベスを「みかけ」として否定する。

この場に於けるマクベスと、^{とも、い、び}（蠟燭の火）の対立は、マクベスの「対自」を具象化したもののなのだ。このように考えれば、イタリックの個所（lighted—Out, out, brief candle—shadow）は、マクベスの人生Ⅱ「まこと」という自己欺瞞は、‘brief candle’によって質的変化をし、人生Ⅱ「みかけ」という認識（正しくは自己認識）になっている事が分る。ここにも「対自」の弁証法的展開がみられ、この展開が劇的な効果を収めているのである。マクベスが今まで自己欺瞞で以って、「まこと」と信じて来た自分達の人生が、「みかけ」にすぎない事を認識したのだ。

この認識は、人生を「哀れた役者」に譬え、人生は「痴呆^わの物語る話であり、……無意味だ」と結論する。マクベスにとって、人生は無意味であった。彼の人生は野望に明け暮れ、自己欺瞞に覆われていたからだ。自己を無とする自己認識は、実存への第一歩である。

ハーバート・リードはこう言っている。

「宇宙に於ける人間の無意味を悟ることは、一種の絶望的な挑戦にあうと言える。私は無意味だとしても、私の人生が無駄な情熱の燃焼だとしても、少なくとも、私は、全てのみかけを軽蔑する事が出来るし、私の心即ち意識の独立を立証出来るのである。人生は明らかに無意味だが、人生

に意味があるようなふりをしよう。……我々が自由であり、我々自身の運命に対して責任がある事を我々は確信出来ないが、我々は自由であり、運命に対して^あまるで責任があるかのようにふるまうのである。」

リードは、実存主義を大まかに二つに分け、その一方（サルトル等）を「as if の哲学」として、かくの如く述べた。（もう一方は「only thus の哲学」と名付け、後に引用する。）

五幕八場でマクダフと最後の一戦をまじえるマクベスには、「as if の哲学」がある。

マクダフが予言の「女の腹から生まれた」男であるを知って、一旦は、戦いを放棄したマクベスが、「世人の見せ物になれ」と言われると、再び起ち上って戦う。人生の無意味を悟りながら、まるで意味があるかのように戦うマクベスには、サルトル的な実存を私は認めるのである。

一方、マルカムによる「秩序」の回復で終るこの劇には、リードの言う「only thus の哲学」も認められる。リードはこう言っている。

「我々は、虚無の深淵に直面した人間という実存的立場に立っている。この立場は意味をなさない。……世界は無意味であるが、然し、単純な仮説を立てれば——即ち、神

が先験的に存存すると仮定すれば——それは意味を持つようになる。……これは‘only thus’の哲学と呼べる——何故なら、かくしてはじめて我々の存在は意味を持つから。⁽²⁶⁾

「人生は無意味だ」と結論したマクベスの虚無的な独白の直後に、「秩序」を回復する正義の軍隊が、日光の眩しく射し込む内に、進撃して来る。虚無的な自己認識は「発見」(anguinosis)であり、軍隊の進撃の場面は、「急転」(peripeteia)であると思う。そして、最後の「秩序」の回復は、「浄化」(katharsis)である。

「浄化」は、観客の質的变化をもたらすものである。⁽²⁷⁾「発見」——「急転」——「浄化」のプロセスに於いて、観客は、実存に目覚め、人生を有意義あらしめるために、虚無的なマクベスを否定し、「秩序」の光を求めるのである。この時、ともしび(candle)で示された人間のあるべき自己が大きな意味を持って来るのである。最後にマタイ伝五章十四—六節を引用しておく。

Ye are the light of the world. A city that is set on an hill cannot be hid. Neither do men light a *candle*, and put it under a bushel, but on a candlestick; and it giveth light unto all that are in the house. Let your light so shine before men, that

they may see your good works, and glorify your Father which is in heaven.

(あなたがたは、世の光である。山の上にある町は隠れることができない。また、ともしびをつけて、それを柵の下におく者はいない。むしろ燭台の上において、家の中のすべてのものを照らせるのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよい行いを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい。)

(『マクベス』からの引用は新アーデン版による)

(一九六四・十二・十九)

注

① サルトル著「存在と無」(松浪訳) 参照。

② 同上の書参照。

③ 白井健三郎「サルトルの思想と文学」(岩波「文学」一九六三年三月号所収)より引用。

④ 菅 泰男「シェイクスピア悲劇における喜劇的要素について」新月社「シェイクスピア研究」所収)の中で、「ヴェローナの二紳士」の二人の道化、スピードとランスについて言及している。

⑤ 「ヘンリー四世」二幕二場「I am not only witty in myself, but the cause that wit is in other men」とジョン・オールスタッフの言葉がある。

⑥ 「ハムレット」一幕二場(75—76)

Queen. Why seems it so particular with thee?

Hamlet. Seems, madam! nay, it is; I know not “seems.”

⑦ サルトル著「殉教と反抗」(白井浩司・平井啓之訳)参照。

⑧ ⑥を見よ。

- ⑨ サルトル著「存在と無」参照。
- ⑩ 同上の書、第一部、第二章、I. pp. 159～160 参照。
- ⑪ 「マクベス」一幕二場、24行。
- ⑫ 同上、一幕三場、82行。
- ⑬ 山本修二「三つの演劇用語について」(京大教養部「英文学評論」IV、所収)より引用。
- ⑭ L. C. Knights: Explorations 所収。
- ⑮ サルトル「存在と無」参照。
- ⑯ 同上の書参照。
- ⑰ Stoll: Shakespeare Studies. Chap. V. 参照。
- ⑱ 菅 泰男「Shakespeare 劇の幽霊に就いて」(「英文学研究」一九四八年一月、所収)参照。
- ⑲ 同上、参照。
- ⑳ L. C. Knights 前掲の書参照。
- ㉑ サルトル「存在と無」第一部第二章参照。
- ㉒ 新アーデン版の注参照、「なされた行いに対するだけではなく、思いつかれた考えに対する悔いを意味するために、昔使われた」。
- ㉓ 渡辺克巳「Out, Out, Brief Candle」(九州大紀要13号所収)参照。(渡辺氏は、本年二月に他界された。謹んで合掌。
- ㉔ L. C. Knights: 前掲の書参照。
- ㉕ Herbert Read: 'Existentialism Marxism & Anarchism' Chap. 1 より引用。
- ㉖ 木下順二「ドラマの目的は何か」(岩波「文学」一九六二年九月号所収)参照。